

保育者養成校における「5領域」の総合的な学びに関する予備的検討

采翠 真澄*

Preliminary Research on the Comprehensive Learning of “5 areas” at Early Childhood Education and Care

WAKEBIKI Masumi

要 約

保育者養成校における「5領域」の総合的な学びを考察するために、中部大学現代教育学部幼児教育学科において各領域を担当する教員を対象に質問紙調査を行った。その結果、各領域担当教員は5領域の総合的な学びを重要視し、学生がその理解のもと保育内容の学びを深められるよう様々な取り組みを実践しているものの、それぞれの専門領域から見た他領域との関連性の学習までにとどまっており、領域を超えた総合的な連携がなされていないことが明らかになった。

はじめに

保育者養成校において、保育内容の5領域はそれぞれ科目が設定されているが、言うまでもなく、子どもの生活や遊びにおいては5領域が複雑に関連しながら子どもの育ちに影響する。そのため、保育者はこの関連性を意識しながら保育を計画、実践していかななくてはならない。実際、『保育所保育指針解説』には、「健康・人間関係・環境・言葉・表現」の五つの領域に関わる学びは、子どもの生活や遊びの中で、互いに大きく重なり合い、相互に関連をもちながら育まれていくものであることに留意が必要である¹⁾と記されている。また『幼稚園教育要領解説』には、「幼稚園教育における領域は、それぞれが独立した授業として展開される小学校の教科とは異なるので、領域別に教育課程を編成したり、特定の活動と結び付けて指導したりするなどの取扱いをしないようにしなければならない²⁾と、明確に

小学校以降の教科教育との相違点が記されている。これはつまり、保育者養成校に入学してくる学生が、その小学校以来行われている教科教育の影響からか、個々の領域をそれぞれ単独での学びと捉えてしまう可能性があるということの表れではないだろうか。

こうした背景からか、この5領域をどのように総合的に学生が学ぶかという先行研究は多い。井上、藤崎、辻野、棚橋、劉ら(2018)³⁾は、それぞれの専門領域に関わる教育内容研究知見に依拠して5領域科目の内容構成について言及し、中山(2018)⁴⁾は造形表現の立場から5領域の総合的な学びについて考察している。一方で、一つの教材を5領域の学びに分けて考察しているのが、片山ら(2009)⁵⁾の「動物の世話」や、吉田ら(2018)⁶⁾の「紙人形劇」などである。また、清水(2015)⁷⁾は、5領域を統括する「保育内容総論」の科目から考察を行っている。

これらの研究の多くは保育者養成校教員によって行われているものであるが、この保育者養成校の5領域と保育内容総論の担当教員について、源ら

* 中部大学現代教育学部幼児教育学科

(2014) は、それぞれがどのような研究の専門分野を持っているのかについて調査を実施している。その結果、「複数の専門分野を持つ研究者が増えていること、教科教育学を専門分野とする研究者や、保育実践者から養成校教員となった者が、保育内容の授業科目を担当することが増えている」⁸⁾ ということを明らかにした。

これらを総合すると、保育者養成において5領域の総合的な学びが重要であることは共通認識がなされているものの、その担当者はそれぞれ違った専門領域の視座から考え、授業での実践を行っていると言えるのではないだろうか。

そこで本研究では、中部大学現代教育学部幼児教育学科の5領域に関わる科目担当者に対して質問紙調査を実施し、それぞれの共通点や相違点を明らかにすることで、5領域の総合的な学びの構築の足掛かりとしたい。

1 研究の目的

本研究は保育者養成校で学ぶ学生が、保育所保育指針・幼稚園教育要領・認定こども園教育保育要領の5領域のねらい及び内容を連動し、子どもの姿に関連付けができるようになるためには、養成校の保育内容科目のカリキュラムやシークエンス、担当教員の連携等はどうかを明らかにすることを最終的な目的とする。その第1歩として、本稿では各担当教員への質問紙調査により、5領域の総合的な学びに関する意識や実際に行っている取り組みの共通点、相違点を整理することから着手する。

2 調査の概要と方法

(1) 調査対象

質問紙調査は、中部大学現代教育学部幼児教育学科において、著者を除く保育内容関連の科目を担当する6名の教員（専任教員4名、非常勤講師2名）を対象とした。

(2) 調査時期

2019年度春学期15週の授業終了後

(3) 調査方法

質問紙調査の素案を配布し、記入要領、分析方法、分析にあたっては出された意見はコード番号付け、匿名性を守ることを説明した。記名式での実施、及び、得られた結果の公表・発表について、書面にて了解を得た。後日質問紙を配布し、1週間以内の回収を求め、全員の回答を得た。

(4) 調査の概要

調査項目は、5領域に関する科目の趣旨と現在の各科目の授業内容（シラバス）とから、「担当科目」「学生の身に付けさせたい力」「授業で教員が心がけていること」「授業での工夫」「学生と子どもとの関わりに対する意識」「学生が5領域を統合して考えるために必要なこと」の6つの項目について作成した。本稿は予備的検討の段階であることから、広く授業担当者の意見を募ることを目的として、自由記述による回答とした。

(5) 分析方法

回答者から得られた自由記述の回答を、松尾ら(1992⁹⁾・1993¹⁰⁾の手順に従って、以下のように分析した。なお、本稿では3つの項目（学生の身に付けさせたい力・授業で教員が心がけていること・学生が5領域を統合して考えるために必要なこと）についての記述結果を分析対象とした。

授業担当者以外の幼児教育学科専任教員1名と筆者で一致した記述を1次カテゴリーとして分類した。但し、1件の自由記述中に複数の意見が列挙されている場合は、それぞれ独立したものとして分類した。1次カテゴリーの内容が似たものを集約、包括し、各項目の上位カテゴリーを設定した。各項目の上位カテゴリーの名称と定義は以下の通りである。

① 3項目の上位カテゴリーの名称と定義

ア項目「授業で学生に身に付けさせようとしておられる力は何ですか」

ア-1 「各領域に関する知識」：各領域固有の知識であり、他領域には関わりの薄い記述

ア-2 「各領域に関する技術」：各領域固有の技術であり、他領域には関わりの薄い記述

ア-3 「各領域に関する指導法」：各領域固有の指導

方法に関するものであり、他領域には関わりの薄い記述

ア-4 「各領域に関する教材開発の能力」：各領域固有の教材の開発に関する記述であり、他領域には関わりの薄い記述

ア-5 「保育に対する点検評価の能力」：領域に関係なく、保育そのものを点検評価する力に関する記述

ア-6 「その他」：上記以外の記述

イ項目「授業で心がけておられることはなんですか」

イ-1 「授業の方法」：領域に関係なく、学生が授業内容を理解するための取り組みに関する記述

イ-2 「子ども理解に繋げる取り組み」：領域に関係なく、学生が子ども理解を深めるための取り組みに関する記述

イ-3 「専門知識の提供」：各領域固有の知識であり、他領域には関わりの薄い記述

イ-4 「その他」：上記以外の記述

ウ項目「学生が5領域を統合して考えるために必要と思われることはなんですか」

ウ-1 「実践・実践例からのフィードバック」：実践・実践例での子どもの姿を5領域に関連付けする経験に関する記述

ウ-2 「各領域の関連付け」：各領域が統合していることの理解に関する記述

ウ-3 「担当教員の連携」：各領域担当教員のコンセンサスに関する記述

ウ-4 「各科目間の連動」：各領域科目で共通の題材を取り入れるなどの記述

ウ-5 「総合科目の設定」：5領域を包括した科目の設定に関する記述

ウ-6 「5領域に関わる科目の開講時期」：保育内容、保育内容総論、保育原理等の科目の開講時期とシーケンスに関する記述

ウ-7 「考えるための土台」：3つの柱と10の姿の理解に関する記述

ウ-8 「その他」：上記以外の記述

② 再分類化と評定

上記の通り分類した後に、自由記述の内容を読み

直して、設定した上位カテゴリーに再分類化した。再分類化の評定作業は授業担当者以外の幼児教育学科専任教員1名と筆者が独立に行い、協議を重ねて一致した記述のみを分析対象とした。

3 結果

(1) 項目1「授業で学生に身に付けさせようとしておられる力はなんですか」の結果(表1)

表1：「授業で学生に身に付けさせようとしている力」に関する自由記述意見

有効回答者6名		
1. 各領域に関する知識	14件	28.0%
2. 各領域に関する技術	11件	22.0%
3. 各領域に関する指導法	5件	10.0%
4. 各領域に関する教材開発の能力	4件	8.0%
5. 保育に対する点検評価の能力	2件	4.0%
6. その他	14件	28.0%
合 計	50件	100.0%

50件の意見が得られた。回答者一人あたり、平均8.3件の記述であった。以下、出現率の高い順に取り上げる。

第1位は「各領域に関する知識」で、14件、28.0%であった。その内訳は、各領域固有の専門知識に関する記述が10件、基礎的な知識に関する記述が2件、保育所保育指針・幼稚園教育要領・認定こども園教育保育要領における各領域の位置付けに関する記述が2件であった。

第2位は「各領域に関する技術」で、11件、22.0%であった。その内訳は、領域固有のコミュニケーション技術に関する記述が8件、領域固有の技術に関する記述が2件、音楽・造形・身体表現の実技に共通した技術に関する記述が1件であった。この上位2つのカテゴリーで全体の50%を占めている。

第3位は「各領域に関する指導方法」で、5件、10.0%であった。その内訳は、領域に関する指導法の記述が3件、指導計画作成の記述が2件であった。

第4位は「各領域に関する教材開発の能力」で、4件、8.0%であった。内訳は、その領域独自の教材

開発の記述が2件、全ての領域に関わる記述が2件であった。

第5位は「保育に対する点検評価の能力」で、2件、4.0%であった。内訳は、指導計画の点検・評価に関する記述が1件、保育そのものの点検・評価に関する記述が1件であった。

その他の記述では、人間力に関する記述が11件、基礎学力に関する記述が2件、その他の記述が1件見られたが、これは設問の趣旨から外れるため、分析対象から除外する。

(2) 項目2「授業をするにあたって心がけていることはなんですか」の結果（表2）

表2：「授業で心がけていること」に関する自由記述意見
有効回答者6名

1. 授業の方法	12件	32.5%
2. 子ども理解に繋げる取り組み	9件	24.3%
3. 専門知識の提供	3件	8.1%
4. その他	13件	35.1%
合 計	37件	100.0%

37件の意見が得られた。回答者一人あたり、平均6.1件の記述であった。以下、出現率の高い順に取り上げる。

第1位は「授業の方法」で、12件、32.5%であった。その内訳は、アクティブラーニングに関する記述が8件、視覚教材の活用に関する記述が2件、学生による振り返りに関する記述が2件であった。

第2位は「子ども理解に繋げる取り組み」で、9件、24.3%であった。その内訳は、実体験による理解に関する記述が7件、乳幼児の視点を持つことに関する記述が2件であった。

第3位は「専門知識の提供」で、3件、8.1%であった。その内訳は、領域ごとの記述が1件ずつであった。

その他は13件あり、その内容は多岐に亘っていたが、一番多かった内容は、一般的な授業に対する姿勢に関する記述で、これは設問の趣旨から外れるため、分析対象から除外する。

この質問項目からは、学生が領域に関する授業内容を理解するための様々な工夫が行われているもの

の、5領域の総合的な学びという意味では、具体的な記述の出現は見られなかった。

(3) 項目3「学生が5領域を統合して考えるために必要と思われることはなんですか」の結果（表3）

表3：「学生が5領域を統合して考えるために必要だと思うこと」に関する自由記述意見
有効回答者6名

1. 実践・実践例からのフィードバック	4件	18.2%
2. 担当教員の連携	3件	13.7%
3. 各領域の関連付け	2件	9.1%
4. 各科目間の連動	2件	9.1%
5. 総合科目の設定	2件	9.1%
6. 5領域に関わる科目の開講時期	1件	4.5%
7. 考えるための土台	1件	4.5%
8. その他	7件	31.8%
合 計	22件	100.0%

22件の意見が得られた。回答者一人あたり、平均3.6件の記述であった。以下、出現率の高い順に取り上げる。

第1位は「実践・実践例からのフィードバック」で、4件、18.2%であった。その内訳は、現場での事例に関する記述が2件、学生自らの体験に関する記述が1件、授業内容・教材に関する記述が1件であった。

第2位は「担当教員の連携」で、3件、13.7%であった。その内訳は、全て授業内容の相互理解に関する記述であり、内1件はシラバス作成段階での共有の記述があった。

第3位は「各領域の関連付け」と、「各科目間の連動」、「総合科目の設定」が同率で、2件、9.1%であった。

第6位は「領域に関わる科目の開講時期」と、「考えるための土台」に関する記述で、それぞれ1件、4.5%見られた。その他の記述では、人間力に関する記述が4件、基礎学力に関する記述が2件、保育者としての姿勢に関する記述が1件見られた。

4 考察

以上のように、5領域の担当教員はそれぞれ領域に関する専門知識・技術を授業で学生に伝えながらも、学生が領域を総合的に考え、学ぶために、意識していることや、考えている方法が数多く意見として回答にあった。そのことから、5領域を総合的に考える力を身に付けさせたいという思いは、共通していると言えるのではないだろうか。ただ、その具体的な内容は様々であることも明らかになった。

各領域担当者が最も学生に身に付けさせたいと考えている力は、それぞれの領域固有の知識・技術であり、領域ごとに特化したものである。意見は大きく異なる結果となった。これは教科教育に通じる部分であり、学生が5領域を、子どもの学びにおいて別々のものと捉える一つの要因となり得るとも考えられるのではないだろうか。

また項目3「学生が5領域を統合して考えるために必要と思われることはなんですか」の回答は結果的に分かれ、科目の担当者によって重点を置くところが違うということが明らかになった。それが科目の特性に起因するのか、教員個人の考えによるものなのかは不明であるが、「実践・実践例からのフィードバック」が第1位になったことに関しては、現場での保育実践経験の影響が大きいと思われる。それぞれの領域での研究をベースにする教員は、各領域を総合的に捉えることを念頭に授業を行っているが、保育実践経験をベースにしている教員は、子どもの姿を各領域に分解することを念頭に授業を行っている。言うまでもなく、学びを子どもの活動に繋げることと、子どもの活動の姿から学びに繋げることという、双方向からの視点が学生にとっては必要であるが、この双方向からの視点を、領域ごとに持つことができれば理想的であろう。

それ以外にも、各教員がそれぞれ独自のアイデアを持って授業に取り組んでいるが、シラバス作成段階からの連携や、授業の連動などは、意見として挙がってきてはいるものの、実践されてはいない。こうしたことを実践するためには、5領域及び保育内容総論の担当者が密に連携をする必要があるであろう。更に授業シーケンスを再構築するとなると、授業担当者だけの問題ではなくなる。つまり、その

養成組織全体での連携が必要ということであろう。

5 まとめと今後の課題

本研究から、保育者養成校における「5領域」の総合的な学びは、各領域担当者が他領域との関連性を意識するだけでなく、相互に具体的な連携を持つことで、その質が向上する可能性が示唆された。シーケンスや保育内容以外の授業との連携を考慮すれば、その効果は更に上がるであろう。しかし実際には、各教員の授業持ちコマ数の偏りや非常勤講師が担当する授業の日程、演習に必要な教室の確保など、授業内容ではないところでの調整も必要になる。これは養成校全体での対応が求められることになるが、全て実践することは物理的に難しい部分もあるであろう。

今後は学生に対する意識調査なども実施し、保育者養成校学生が5領域を総合的に学ぶための、より具体的な方法について考えていきたい。

謝辞

本稿執筆にあたっては、花井忠征教授、武藤久枝教授、寺井郁子准教授、山本彩未講師、千田隆弘講師（以上、中部大学現代教育学部幼児教育学科）、伊藤高子氏（学校法人春日井学院という幼稚園副園長、中部大学現代教育学部非常勤講師）、青山美千子氏（元瀬戸市主幹保育士、中部大学現代教育学部非常勤講師）、以上7名の方々に研究協力者として多大なるご協力を頂いた。記して心より感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 『保育所保育指針解説』厚生労働省 2018年 P99より引用
- 2) 『幼稚園教育要領解説』文部科学省 2018年 P134より引用
- 3) 井上邦子・笠次良爾・宮下俊也・高木祐介・横山真貴子「教員養成における幼稚園5領域科目の内容構成(1)―「健康」に関わる教育内容研究知見に依拠して―」『次世代教員養成センター研究紀要 第4巻』奈良教育大学次世代教員養成センター 2018年

- 藤崎亜由子・宮下俊也・横山真貴子「教員養成における幼稚園5領域科目の内容構成(2)―「人間関係」に関わる教育内容研究知見に依拠して―」『次世代教員養成センター研究紀要 第4巻』奈良教育大学次世代教員養成センター 2018年
- 辻野亮・舟橋友香・宮下俊也・森本弘一・横山真貴子「教員養成における幼稚園5領域科目の内容構成(3)―「環境」に関わる教育内容研究知見に依拠して―」『次世代教員養成センター研究紀要 第4巻』奈良教育大学次世代教員養成センター 2018年
- 棚橋尚子・宮下俊也・横山真貴子「教員養成における幼稚園5領域科目の内容構成(4)―「言葉」に関わる教育内容研究知見に依拠して―」『次世代教員養成センター研究紀要』第4巻 奈良教育大学次世代教員養成センター 2018年
- 劉麟玉・宮下俊也・宇田秀士・横山真貴子「教員養成における幼稚園5領域科目の内容構成(5)―「表現」に関わる教育内容研究知見に依拠して―」『次世代教員養成センター研究紀要 第4巻』奈良教育大学次世代教員養成センター 2018年
- 4) 中山里美「総合的・横断的に領域「表現」を学ぶ授業の取り組み」『富山短期大学紀要 第54巻』富山短期大学 2018年
 - 5) 片山由美・川井薫栄・高橋美知子・古橋エツ子「幼稚園教育における5領域の総合的な指導への一考察：動物の世話をとおして」『花園大学社会福祉学部研究紀要 第17号』花園大学社会福祉学部 2009年
 - 6) 吉田真理子・岩附啓子・小畑真梨子「諸分野の協同による領域「表現」の授業―紙人形劇づくりを通して―」『三重大学教育学部研究紀要. 自然科学・人文科学・社会科学・教育科学・教育実践 第69巻』三重大学教育学部 2018年
 - 7) 清水桂子「保育者養成における遊びの実際から理解へ導く「保育内容総論」の授業展開と一考察」『北翔大学短期大学部研究紀要 第53号』北翔大学短期大学部 2015年
 - 8) 源証香・小谷宜「「保育内容」研究のあり方に関する一考察：保育者養成校における担当教員の専門分野の実態調査から」埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要 埼玉大学教育学部 2014年 P9より引用
 - 9) 松尾久枝・石川道子・二村真秀・渡辺勸持・内藤敬子・清水佳子「未熟児を持つ母親からみたフォロー体制の現状 郵送による追跡調査の自由記述回答の分析」『保健婦雑誌第48巻第9号』医学書院 1992年
 - 10) 松尾久枝・石川道子・二村真秀・内藤敬子・清水佳子・渡辺勸持「ハイリスク児を持つ母親の医療・社会資源へのニーズ」『小児の精神と神経第33巻』日本小児精神神経学会・国際医書出版 1993年

受付日 2019年9月30日

受理日 2019年10月29日